

## メバチ インド洋

Bigeye tuna *Thunnus obesus*

## 管理・関係機関

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

## 生物学的特性

- 最大体長・体重: 200 cm (尾叉長) ・ 210 kg (総重量)
- 寿命: 15 歳
- 性成熟年齢: 3 歳前後 (約 110 cm) (50%性成熟年齢)
- 産卵期・産卵場: ほぼ周年。表面水温 24°C以上の熱帯・亜熱帯域
- 索餌期・索餌場: 4~9 月に南緯 25~40 度
- 食性: 魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者: サメ類、海産哺乳類

## 利用・用途

刺身、寿司ネタ、缶詰原料等

## 漁業の特徴

本資源はインド洋の沿岸島嶼国の伝統的な小規模漁業（刺し網、手釣り、ひき縄、竿釣り、敷網等）で長年漁獲されてきた。IOTCの公式漁獲統計によると、統計の始まった1950年の漁獲量は62トンであり、それ以前の漁獲も極僅かであったと見られる。その後、日本の遠洋まぐろはえ縄漁船が1952年にジャワ島南部海域で操業を開始し、台湾、韓国のまぐろはえ縄漁船も参入、1980年代にはフランス、スペイン及びセーシエルの大型まき網漁業も主に西インド洋に参入した。漁法別の漁獲割合は、1952年から1980年までは、遠洋まぐろはえ縄が毎年の全漁獲量の平均およそ96%を占め、1981年以降以降もしばらくはまぐろはえ縄漁業による漁獲が主体であったがまき網及びその他漁業の比率も次第に増加し、最近5年間（2020~2024年）においては、はえ縄約37%、まき網約40%、その他約23%である。

## 漁獲の動向

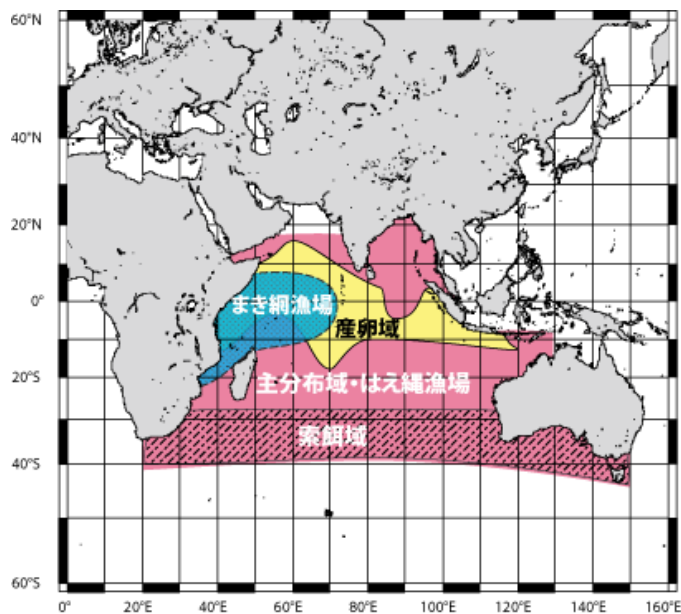
総漁獲量は、1950年以降徐々に増加し1978年に5万トン台、西インド洋の大型まき網の開始に伴い1988年に7.7万トン、1999年には約13.3万トンに達した（最大漁獲量は2004年の約13.7万トン）。その後、ソマリア沖の海賊の影響もあり減少傾向が続いたものの、2020年以降は増加し、最新年（2024年）は約8.7万トンとなった。遠洋まぐろはえ縄の漁獲量は操業開始年の1952年から徐々に増加し、1994年から2007年までは、2004年の約10.4万トンをピークに高い水準（8万トン以上）を維持した。しかし海賊の影響で急減し、海賊活動消滅後に一時回復したが減少傾向が続き、2024年には約3.2万トンにまで落ち込んだ。まき網による漁獲は、1980年代に急増し1万トン台となり、1999年に4万トン台に達するまで増加傾向を示した。その後減少し3万トン前後で推移したが、2010年代から再度増加傾向を示し、2018年には約4.7万トンと統計上最大の漁獲量を記録した。その他（途上国の小規模漁業）の漁獲量は、1950年から2008年まで概ね単調に増加し、約1万トンに達した。その後、2016年に2.3万トンまで急増し、一度急減したものの、2024年時点では再び約2.3万トンという高い水準を示している。

### 資源状態

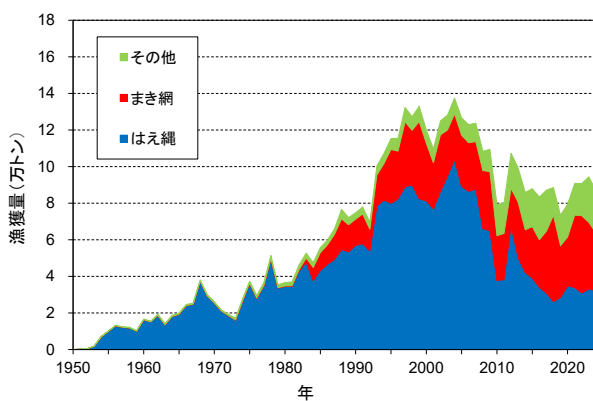
第27回熱帯まぐろ作業部会（2025年）で実施された統合モデル（SS3）による資源評価の結果、最大持続生産量（MSY）=10.0万トン（80%信頼区間：9.4万～10.6万トン）、MSYを実現する漁獲死亡係数（F）に対する現状のFの比率  $F_{2024}/F_{MSY}=0.94$ （80%信頼区間：0.69～1.78）及びMSYを実現する産卵親魚量（SSB）に対する現状のSSBの比率  $SSB_{2024}/SSB_{MSY}=0.98$ （80%信頼区間：0.71～1.25）と推定された。しかし、中央値ではSSBが  $SSB_{MSY}$  を下回り、SSBが  $SSB_{MSY}$  を上回る確率は45.6%（50%未満）であった。これらの結果から、本資源は乱獲されているが、過剰漁獲ではないと判定された。

### 管理方策

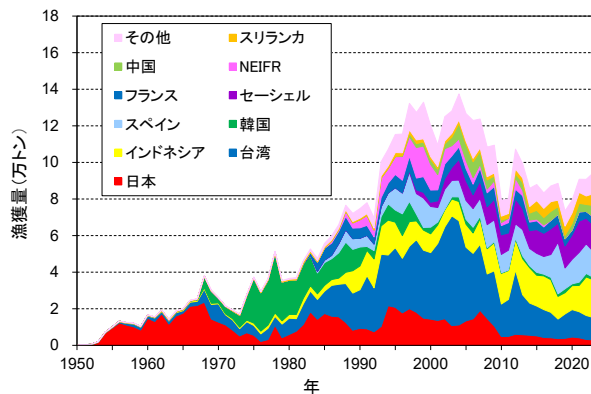
2022年に本種の管理方式（MP）が採択。2025年の年次会合では、以前の決議に代わるものとして、2026年、2027年及び2028年のメバチの漁獲制限を設定した。総許容漁獲量（TAC）は、MPに従い、2026年、2027年及び2028年の各年で92,670トンと定められた。このTACは、現在のTACから15%の増加となる。なお、日本の年間漁獲制限は、2026年、2027年及び2028年の各年で4,237トンとなった。また、2024年の第28回年次会合においてメバチ・キハダの若齢魚を多獲するまき網の人工浮き魚礁（FAD）に関し、1隻あたりの稼働数の上限（2026年以降250基、2028年以降225基）、取得数の上限（2026年以降400基）、まき網支援船の制限（2026年以降まき網12隻以上に対して3隻、2029年以降同15隻以上に対して3隻）等の措置が採択されている（一部例外規定あり）（決議24/02）。以上に加え、各魚種共通の管理措置（決議・勧告）として、漁船数制限（決議03/01、勧告25/14）、義務提出データ（決議15/01）、ログブックによる漁獲量・漁獲努力量報告（決議15/02）、オブザーバープログラム（決議25/06）等がある。



インド洋メバチの漁場及び産卵域・索餌域



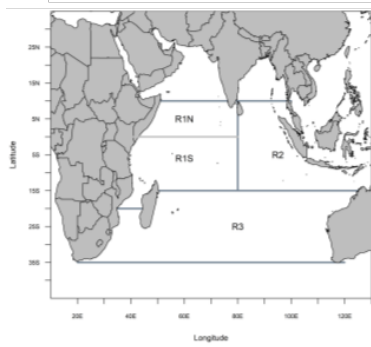
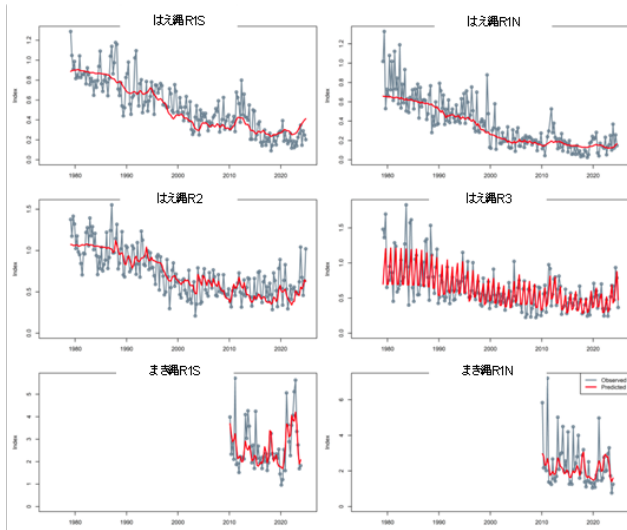
インド洋メバチの漁法別漁獲量 (1950～2024年)



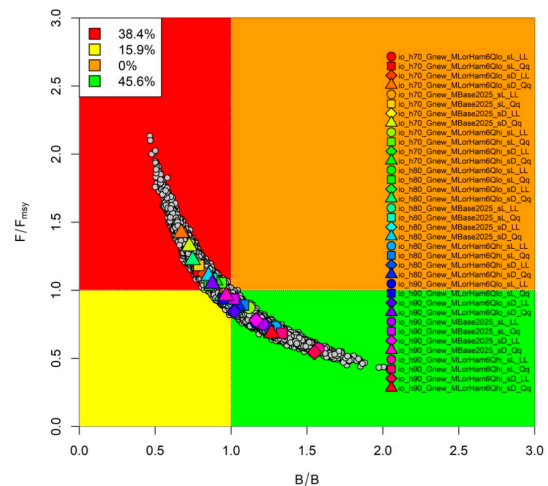
インド洋メバチの国・地域別漁獲量 (1950～2024年)  
NEI: Not Elsewhere Included (国籍不明)。

メバチ（インド洋）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 （最近5年間）	7.9万～9.4万トン 最近（2024）年：8.7万トン 平均：8.8万トン（2020～2024年）
我が国の漁獲量 （最近5年間）	3,000～4,600トン 最近（2024）年：3,290トン 平均：3,600トン（2020～2024年）
資源評価の方法	SS3による解析 漁獲量、まぐろはえ縄漁業 CPUE 及び生物情報により水準と動向を評価
資源の状態 （資源評価結果）	SSB <sub>2024</sub> /SSB <sub>MSY</sub> =0.98（80%信頼区間：0.71～1.25） F <sub>2024</sub> /F <sub>MSY</sub> =0.94（80%信頼区間：0.69～1.18） 中央値ではSSBがSSB <sub>MSY</sub> を下回り、SSBがSSB <sub>MSY</sub> を上回る確率は45.6%。 本資源は乱獲されているが、過剰漁獲ではない（神戸プロットのイエローゾーン）
管理目標	MSY：10.0万トン（80%信頼区間：9.4万～10.6万トン）
管理措置	メバチ管理措置： MPに基づくTACの設定、2026～2028年のTAC 92,670トン、 主要国・地域への漁獲上限の設定（決議22/03及び25/04）  FAD管理措置： FAD設置数及び取得数の制限、 まき網支援船の制限等 （15.キハダ（インド洋）詳細版及び31.カツオ（インド洋）詳細版も参照）（決議24/02）  その他関連措置： 漁船数制限（決議03/01、勧告25/14）、統計データの提出義務（決議15/01）、 ログブックによる漁獲量・漁獲努力量報告（決議15/02）、オブザーバープログラム（決議25/06）ほか
管理機関・関係機関	IOTC（1996年発効）
最新の資源評価年	2025年
次回の資源評価年	未定

\* 2021年までのデータを使用した資源評価の結果に基づく。



2025年の資源評価（SS3）で使用された標準化CPUE（上図）及びCPUE用の海域区分（下図）  
赤線はSS3の予測値、灰色の線は標準化CPUE。



インド洋メバチ資源評価（SS3）に基づく神戸プロット（1950～2024年）  
2024年（最終年）の資源状況の位置は36シナリオ（色別各種シンボル表示）。色の違いは36モデルの結果を示し、それぞれ3通りのM、2種類の異なる選択率の仮定、3種の異なるスティーブネス：0.7、0.8、0.9（スティーブネスの意味は「用語解説」参照）及び2つの漁獲効率向上シナリオの組み合わせである。灰色の点は最終年における不確実性の範囲を示す。